

日本定住ビルマ人のアイデンティティ形成に 関する一考察

梶村 美紀

はじめに

1. 在外ビルマ人の現状
2. 移住者のアイデンティティ
3. 日本定住ビルマ人の特徴
4. ビルマとのつながり、日本とのつながり
 - 4-1: アウンさん（仮名）の場合
 - 4-2: エイさん（仮名）の場合
 - 4-3: イェさん（仮名）の場合
 - 4-4: 3名の共通点と相違点

おわりに

キーワード：日本定住ビルマ人、アイデンティティ、日本国籍、ビルマとのつながり、日本とのつながり

はじめに

本稿は、日本社会における「ビルマ系日本人」誕生の可能性を視野に入れながら、日本に定住するビルマ¹出身の人びと（以下、日本定住ビルマ人と表記）のアイデンティティ形成のあり方を明らかにすることを目的としている。日本定住ビルマ人は、活発な反政府活動を展開してきており、同胞からはよく知られた存在であるが、政治的に複雑な立場におかれていたことや、多くの人からオーバーステイの状態になっていたことから、日本社会においては不可視な

存在になっており、長らく研究対象にならなかった。

詳細は後述するが、日本定住ビルマ人の多くは非正規雇用のサービス業に従事している。永住者資格や日本国籍を取得する人が増加しており、実質的に日本社会を構成する一員となっている（梶村美紀2015）。今後も日本に定住する可能性が高く、将来「ビルマ系日本人」というカテゴリーの人びとがうみだされる可能性もある。日本社会を構成する人びとの多様性の実情を把握するためにも、日本定住ビルマ人のアイデンティティのあり方を調査研究することの意義は大きい。

1. 在外ビルマ人の現状

国境を越えた人の移動は増大し、「単一民族国家」を標榜していた日本においても、移民受け入れのあり方が議論されるようになってきた。しかし、日本には、すでに数世代にわたって生活を営んできたオールドカマー、1970年代後半以降の経済的要因が主なきっかけとなり来日したニューカマーが存在しているのは周知の通りである。そのニューカマーの中にビルマ出身者がいる。

¹ 現在のミャンマー連邦共和国。ビルマを用いる理由については、梶村美紀「日本定住ビルマ人のネットワーク形成過程——少数民族グループとビルマ民族の連帯

を事例に」『アジア太平洋研究センター年報』第11号、2014、p.17を参照されたい。

ビルマでは、軍主導の政治が長らく続いていたが、2011年に「民政移管」を果たし、2016年には民主化の象徴であるアウンサンスーチー率いる国民民主連盟による新政権が発足するなど、開かれた国家形成への動きが現実のものとなりつつある。諸事情により、本国以外で働くビルマ人も少なくなく、在外ビルマ人からの送金は同国にとって重要な外貨収入源となっている（久保公二2016）。最大の出稼ぎ先である隣国タイに滞在するビルマ人は約300万人と見積もられ、一人当たり月に100ドルと仮定すると、タイからビルマへの年間送金額は約36億ドルに上る。2012年4月にタイを訪問したビルマ政府関係者は、ビルマ国内の労働市場拡大にはまだ時間がかかるため、海外送金に頼らなければならず、在外のビルマ人労働者の権利擁護が重要であると述べている（山田美和2012）。

約15年におよぶ自宅軟禁から解放されたアウンサンスーチーが、国会議員として初めての海外訪問先として選んだのも、タイであった。隣国と友好的な関係を構築するという目的はもちろんあるが、彼女の訪問のもう一つの目的は、在タイのビルマ人労働者を激励することであった。当事者が直面する劣悪な労働環境等について耳を傾け、彼・彼女らに寄り添う姿勢から

は、今しばらく当該地に残って外貨稼ぎをする役割を担ってほしいとのアウンサンスーチーの意思表示であったと捉えることができよう。

ビルマ政府発表の統計²によれば、在外ビルマ人の約4分の3がタイ、15%弱がマレーシアに滞在しており、全体の9割を占める。タイでは第一次産業および製造業、建設業、家事労働などに従事する人が多い。日本は8番目に多い滞在国となっている。性別で見ると、シンガポールおよびブルネイでは女性が、マレーシアでは男性が多い。出身地別の滞在先を見ると、農村出身者の8割弱がタイ、15%弱がマレーシアとなっており、それ以外はそれぞれ1%前後となっている。それに対し、都市部出身者では、タイが6割弱、以下、マレーシア15%弱、シンガポール8%弱、アメリカ5%弱、ブルネイ4%、韓国3%強となり、タイを除き、都市部出身者が海外に滞在する割合が高くなっている。日本で暮らすビルマ人も、都市部出身者は農村出身者の約3倍になっている。

2. 移住者のアイデンティティ

移住者のアイデンティティについて、移民国家アメリカとエリート層移民とのつながりに着

表1 在外ビルマ人滞在国内別割合（男女別）

	タイ	マレーシア	シンガポール	アメリカ	ブルネイ	韓国	スイス	日本	ドイツ	その他	合計
全体	74.3	14.5	2.4	1.5	1.1	1.0	0.8	0.4	0.4	3.5	100.0
男性	68.4	19.7	1.9	1.8	0.7	1.4	1.1	0.3	0.5	4.2	100.0
女性	82.9	6.9	3.1	1.1	1.8	0.5	0.4	0.5	0.2	2.4	100.0
都市	57.2	14.9	7.7	4.8	4.0	3.1	1.3	1.1	1.3	4.6	100.0
農村	77.4	14.4	1.4	0.8	0.6	0.7	0.7	0.3	0.2	3.4	100.0

Executive Summary of Myanmar Labour Force, Child Labour and School-to-Work Transition Survey, 2015を元に筆者作成。

² Executive Summary of Myanmar Labour Force, Child Labour and School-to-Work Transition Survey, 2015. The Republic of the Union of Myanmar Ministry of Labour, Immigration and Population Department of

Labour in collaboration with the International Labour Organization (http://www.ilo.org/wcmsp5/groups/public/--asia/--ro-bangkok/--ilo-yangon/documents/publication/wcms_516117.pdf, 2017年11月30日閲覧)。

目した研究では、アメリカと移民の出身国との物理的な移動のみならず、当事者の柔軟なアイデンティティの使い分けが指摘されている (Aihwa Ong1999)。しかし、未だ外国人に対して閉鎖的とされる日本では、出身国や地域とのつながりを維持しながら、柔軟なアイデンティティをもつことは容易ではない。例えば、国際的な専門職での就労という社会的立場にある、中国・韓国・フィリピン出身のニューカマー・エリート層は、日本とそれぞれの出身国との間に確固とした経済的なつながりは有するが、日本国籍を取得し、日本社会に溶け込んでも、日本人としては扱われない、すなわち「外国人」であるとみなされることは自明であるため、生活に支障をきたさない限り、日本人になることは必要ではないと考えるという (Gracia Liu-Farrer 2015)。

とはいえ、近年の日本では定住外国人数の増加に加え、国際結婚カップル、その間に生まれる子ども、難民、無国籍者など、多様な立場の人びとの存在が認識されるようになってきている。「単一民族」で構成されていると長らく信じられていた日本においても、その幻想は過去のものになりつつある。そのような社会の変化を受け、「マルチ・エスニック・ジャパニーズ」、または、「〇〇系日本人」という捉え方が提示されている³。「〇〇系日本人」とは、「コリア系日本人」や「フィリピン系日本人」のよ

うに、エスニックな出自を「〇〇系」と表し、国籍や市民権などのシビックな視点を「〇〇人」、「日本人」と表す捉え方である。多様化する特別永住者を例に、日本国籍未取得であっても「コリア系日本人」と捉えるべきであるとの提案もなされている (李洙任2016)。日本国籍取得者⁴などがこの「日本人」に含まれるが、日本国籍の有無のみが基準となっている訳ではない。

例えば、国籍とアイデンティティの関係についてみてみたい。日本国籍取得者が最も多いコリアンの間では、歴史的経緯から、日本国籍取得は「民族の裏切り」と捉えられる傾向にあった。日本国籍取得については、賛否両論があるが、日本社会における様々な不利を回避するためであり、コリアンとしての民族意識を捨てることにはならないという考え方もある (佐々木 2014)。また、日本国籍を取得した在日コリアンを対象に実施された調査からは、取得前後の当事者のアイデンティティのあり方が確認できる⁵。分析対象者は、1999年から2000年にかけて日本国籍を取得した114名の在日コリアン (うち112名は日本生まれ、2名は朝鮮半島生まれ) である。調査結果の特徴として、日本国籍取得後にアイデンティティが日本人に変化した人が多く存在した点が指摘されている⁶。本稿の関心からは、取得前であっても、日本人だと考えていた人が24.8%、ダブルだと考えていた

³ 駒井洋監修 佐々木てる編著2016『マルチ・エスニック・ジャパニーズ 〇〇系日本人の変革力』明石書店。

⁴ 統計によれば、1952年以前には333名、1952年から2016年にかけて540,067名の人が日本国籍を取得した。2016年の取得者数は合計9,554名で、その内訳は、韓国・朝鮮5,434名、中国2,626名、その他1,494名となっている (法務省「帰化許可申請者数、帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移」、<http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf>、2017年11月30日閲覧)。

⁵ 以下の在日コリアンのアイデンティティに関する考察

は、佐々木てる2006『日本の国籍制度とコリア系日本人』明石書店pp.93-105を参考にした。

⁶ 「帰化する前、国籍にかかわらずあなたは何人だと思っていましたか」、「帰化した後、国籍にかかわらずあなたは何人だと思いませんか」という問いに対して、①日本人だと考えていた28名→60名、②ダブル (日本人でもあり韓国人でもあるという、二重のアイデンティティを持っている人々) だと考えていた35名→32名、③もとの国だと考えていた27名→11名、④無帰属だと考えていた23名→10名となっている。

人が31.0%に上り、部分的であれ自己を日本人であると捉えていた人が55%強に上る点に注目したい。

これを年代別にみた場合、若年層においてその傾向が強いが⁷、40歳以上の年輩層においても、日本国籍取得前の60%強⁸が、日本国籍取得後には85%強⁹が、日本人またはダブルであるというアイデンティティをもっている。あくまでも、日本国籍取得者を対象とした調査結果ではあるが、閉鎖的であるといわれてきた日本社会において、日本国籍を取得する前であっても日本人であるというアイデンティティを有する在日コリアンが確認できる。歴史的経緯から、日本国籍の取得を拒み、出自を大切にする在日コリアンの姿は見えやすいが、日本人またはダブルであると考え層の存在は見えづらい。しかし、この調査結果からは、現在の日本社会を構成する人の中には、日本国籍を取得していなくても、自己を日本人であると捉えている人が、一般的に考えられているより多いのではないかと考えられる。

さらに、同調査では、日本国籍取得前後の、日本人意識とコリアン意識の変化の程度を4分類している。若者世代に多い、①日本国籍取得の有無に関わらず日本人としてのアイデンティティが強いパターン、年代に関わらず多い、②日本国籍取得後に日本人としてのアイデンティティが強くなったパターン、わずか2名であるが、③日本国籍取得後にエスニック・アイデンティティ、つまりコリアンとしての意識が強くなったパターン、そして、全体数は少ないが40歳以上に多くみられた、④日本国籍取得の有無に関わらずコリアンとしての意識が強いパター

ンの4つである。この調査は、故地と移住先という二つの極のつながりの程度を類型化したもので、そこには年代ごとに特徴が見出せる。日本国籍の取得によって、コリアンとしての意識が減少していく傾向や高い年代の人ほど国籍とエスニック・アイデンティティを不可分のものとして捉えているとの指摘もある。さらに、もともとエスニック・アイデンティティが弱い世代や、そのようなアイデンティティ自体がない「無帰属」の人などの存在が明らかにされ、日本国籍取得者の多様性が確認できる。

以上は、ほとんどが日本生まれで日本国籍を取得した在日コリアンを対象とした調査であることから、ニューカマーのビルマ人1世と単純な比較はできないが、日本社会で暮らす外国につながる人を有する人のアイデンティティのあり方として参考になる。本稿は、「ビルマ系日本人」誕生の可能性を視野に入れつつ、日本定住ビルマ人のアイデンティティ形成のあり方を明らかにすることを目的としていることから、日本人であることの意識や故地と移住先とのつながりの程度に着目したい。

3. 日本定住ビルマ人の特徴

日本定住ビルマ人の多くは、本国ビルマで1988年におきた大規模な民主化運動やその後の経済開放政策を機に短期滞在や留学を目的に来日、1990～2000年代以降に日本の難民認定制度を利用して在留資格を得た人々である。また、1988年以前から留学等の目的で来日し、定住している人もいる。これらの日本定住ビルマ人の多くは祖国ビルマの「民政移管」後も帰国して

⁷ 若年層（20～29歳）では、日本国籍取得前には85%弱（日本人58.1%、ダブル25.8%）、日本国籍取得後には、97%強（日本人76.5%、ダブル20.6%）が日本人であるというアイデンティティを有している（佐々木2006、p.102）。

⁸ 内訳は、日本人18.4%、ダブル42.1%、もとの国39.5%となっている。

⁹ 内訳は、日本人45.2%、ダブル40.5%、もとの国14.3%となっている。

いない。それどころか、新たに来日する人や、より安定した在留資格や日本国籍取得への動きがみられる。

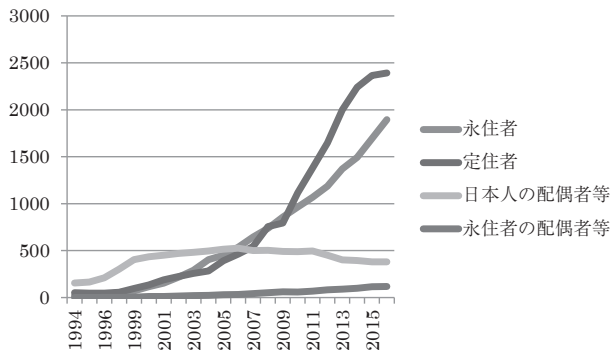
日本定住ビルマ人1世の中心層は30～50歳代の働き盛りであるが、ビルマでの生活再建は容易ではない。また、2世の多くが日本語中心の生活を確立しており、帰国によって教育が中途半端になってしまうことへの懸念など、現実的な問題が当事者の帰国をはばんでいる。多くの日本定住ビルマ人は、飲食店などのサービス業において非正規雇用されているが、職場で比較的良好な人間関係を築いている人も少なくない。日本では、東南アジア出身者の多くは下層サービス業に就労しているとの指摘があるが、日本定住ビルマ人の場合は何とか耐えうる労働環境にあると言える。比較的ましなこの労働環境が帰国後の生活再建への不安と重なり、今後日本での生活を継続し、帰国しないという選択を促している。家族形成が進み、すでに日本企業で働く2世や3世代で暮らす家族もいる。滞在期間の長期化に伴い、より安定的な在留資格へ変更したり、なかには日本の国籍を取得し

ている人もいる（梶村美紀2016）。

2016年末現在の在留外国人統計によると、外交官など「在留カード」や「特別永住者証明書」が交付されない人も含む登録者総数は18,180人、そのうち、97.8%にあたる17,775人が中長期在留者として登録されている¹⁰。この17,775名のうち、73.0%にあたる12,989名が活動目的にそった在留資格（「別表第1」）を有し、27.0%にあたる4,786名が身分または地位に関する在留資格（「別表第2」）を有する。そのなかで、2000年末には115名だった「永住者」資格取得者が2016年末には1,895名へ、2000年末に134名だった「定住者」資格取得者が2016年末には2,392名へと大幅に増加しており、その数は今後も増加すると考えられる。

ビザ免除国が多いか少ないかによって行動範囲が規定される国際社会の実情から、「強いパスポート」と「弱いパスポート」が存在するというパスポート力学が指摘されている¹¹。明らかに「弱いパスポート」に挙げられるビルマのパスポート保有者にとって、国家と個人のつながりを考える際にはこの点についても留意した

図1 ビルマ出身者の在留資格（別表第2）の推移



出典：法務省在留外国人統計「国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人」を元に筆者作成。

¹⁰ 法務省在留外国人統計「国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人」、<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001177523>, 2017年11月30日閲覧。

¹¹ 以下のパスポート力学に関する考察は、陳天璽2012

「国家と個人をつなぐモノの真相--「無国籍」者のパスポート・身分証をみつめて」陳天璽ほか編著『越境とアイデンティフィケーション』新曜社、pp.444-468を参考にした。

い¹²。「強いパスポート」保有者は、思い立ったその日に世界中の多くの国に出かけることが可能であるが「弱いパスポート」保有者は、外国に行く度に必要な書類を早めに準備しなければならない。海外旅行者数は年々増加し、将来的にも増加することが予想できるが、そのような時代にあつて「弱いパスポート」保有者は不平等な扱いを受ける。グローバル化と言われる現代においても、国家が人びとの移動をコントロールしていることは否定できない。

より便利で、自由度が高い「強いパスポート」を入手するために国籍を変更する人もいる。そこには、入手する「強いパスポート」の発行国とのつながりや、当該社会の一員であるとの意識をもつことはほとんどないという。逆に、出身国発行の「強いパスポート」を放棄しなければならない場合には、居住国発行の「弱いパスポート」の取得を望まない人もいるだろう。出身国や地域によって移住先国とのつながりのあり方は、パスポート力学によって左右される場合もありうる。

ある在日ビルマ人元留学生は、ビルマ政府発行の「弱いパスポート」のために翻弄された苦い経験から、日本国籍を取得したが、それは日本人になるためではなく、ビルマ人としての自分らしさを維持するためには確固たる法的地位が不可欠だという思いが根底にあったという(KAJIMURA Miki 2015)。次節で確認するように、なかには、自国政府への不満とは裏腹に自国の「弱いパスポート」に対して愛着を持っている人もいる。ビルマ・パスポートが要因となるアイデンティティのあり方についても留意する。

以下では、筆者がかつてビルマ少数民族グル

ープの来日前後のエスニシティの変容について調査した内容について叙述する(梶村美紀 2014)。まず、来日前のビルマ少数民族グループには、その居住地に関わらず「ビルマ人」という意識は希薄であった。少数民族グループの教育現場や家庭にはビルマ語の世界が浸透しており、ビルマという枠組みに少数民族が包摂されているといえるが、このことは、少数民族が自らをビルマという国家の成員である「ビルマ人」であるという自覚を広げる方向には作用していなかったのである。それよりも、民族州における不安全的な状態、教育や就労の機会が限定されているという経験が、〇〇民族としてのエスニシティをうみだしていた。これらの経験からは、共通の意識としての「ビルマ人」という意識が醸成される契機はきわめて乏しく、来日前のビルマの少数民族は〇〇民族というエスニシティを有しているが、そこには「ビルマ人」という意識は希薄であった。

ところが来日以降、その意識が変容した。来日当初から2003年までは、来日前と同様に〇〇民族として生活していたが、2003年にビルマでおきた民主化運動のリーダー襲撃事件をきっかけに、複数の少数民族の政治組織が連合体を結成し「ビルマ少数民族」として活動するようになった。さらに、2000年代後半以降には、少数民族と民主化組織の連合体が結成され、少数民族は「在日ビルマ人」であることも主張するようになった。少数民族の自己認識の根底にある〇〇民族としての意識が消滅したわけではないが、「ビルマ少数民族」であり、また「在日ビルマ人」であるということを根拠に、積極的な政治運動を展開するようになった。

この一連の動きを通して、〇〇民族の当事者

¹² 2016年6月時点で、ビルマのパスポート保有者が査証なしに渡航できる国はASEAN加盟8カ国(ブルネイ・ダルサマール国、カンボジア、インドネシア、ラオ

ス、フィリピン、シンガポール、タイ王国、ベトナム)のみである。

たちは「ビルマ少数民族」であり、また「在日ビルマ人」でもあるという、重層的なアイデンティティをもつようになっていった。これは、少数民族の来日当初と比較すると大きな変容であった。さらに、日本社会からすれば、初期の定住ビルマ人は不可視な存在であったが、2000年代後半には、日本社会のなかでの難民としての存在感を示すようになった。日本社会との接点がひろがり、定住ビルマ人は不可視な存在から難民として日本社会に受け入れられるようになった。しかし、日本定住ビルマ人が今後どのようなアイデンティティを確立していくのかという点については明らかにされておらず、課題が残っている。

4. ビルマとのつながり、日本とのつながり

以上の議論をふまえ、本節では以下の2点を明らかにする。1点目は、日本国籍を取得していない定住ビルマ人1世が、日本人であるというアイデンティティをもちうるのかという点である。日本国籍を取得した在日コリアンを対象とした調査では、対象者の半数以上が日本国籍取得前から、自己を日本人であると捉えているが、日本定住ビルマ人の場合はどうか。安定した在留資格や日本国籍の取得を望んでいる日本定住ビルマ人は、相当数いると見積もることができるが、その当事者のアイデンティティにはどのような特徴があるのだろうか。諸事情により越境し、来日した1世は、故地への思いが強く、日本人であるという意識は持ちえない、または、持ちづらいと想定できるが、実際はどうか。2点目は、祖国ビルマと日本とのつながりは、それぞれどの程度なのかという点である。越境理由、家族との関係、将来設

計、両国への思いなど、二つの国とのつながりを見出す。

具体的には、1990年代前半に来日し、それ以降、日本を生活拠点とし、日本生まれの子どもを養育しているビルマ国籍保有者3名を分析対象とする。1990年代前半に来日したこの3名は、すでに約四半世紀の日本滞在を経験しており、日本定住ビルマ人社会のなかでは長期滞在者に位置付けられる。聞き取り調査は、2016年8月から2017年2月にかけて、東京、名古屋、ヤンゴンで実施した。半構造的インタビューの手法を用いて、アイデンティティにまつわる話、祖国と日本とのつながり、国籍やパスポートへの思いなどを、1回につき2～5時間程度、日本語で話してもらった。なお、個人を特定できる可能性があるため、聞き取り調査対象者の個人情報には記載しない。

4-1: アウンさん(仮名)の場合¹³

少数民族州出身のアウンさんは、来日前には国境貿易に携わる親戚を手伝っていた。国境では複数言語を操ることができれば商売に有利である。アウンさんの親戚も例外ではなかった。かねてより、ビルマでは軍が全ての権限を掌握し、賄賂がなければ生活に必要な公的手続きもできない日常に不満を抱いていた。1988年の民主化要求デモに参加し、国境から非合法に海外へ出てしまった知り合いもいるが、当時は親戚の商売がうまくいっていたこともあり、反政府活動からは距離をおいていた。積極的に動いたわけではないが、1990年総選挙では居住地のあった少数民族政党を支援した。

1993年頃から、この選挙の関係者が逮捕されるようになり、危険を感じた支援者たちは国境を越えるようになった。意図的であったかどう

¹³ 2017年2月26日に聞き取り調査実施。

かは不明であるが、この時期以降にパスポートを取得しやすくなったとアウンさんは感じており、それは、出国を希望する国民に対する当局側からのある種のサインであったと捉えている。改善されない祖国の政情に嫌気がさしていたこと、また、知り合いが二人、三人と海外に出るようになったこともあり、自分もどこかへ行きたいと考えるようになった。結果的にアウンさんは、当時、容易に入手できた日本行きの観光ビザを取得して来日した。到着後、先に来日していた同胞に連絡をとり、住居や就労先を紹介してもらい生活を始めた。徐々に生活が安定してくると、日本で展開されていた政治活動に関わるようになり、現在でも活動を継続している。

来日後に知り合った同胞から、日本に長期滞在するなら永住者資格に変更すると便利だと聞き、現在は永住者資格で配偶者および子どもと一緒に暮らしている。常に、自分たちの民族や祖国のことを考えており、ビルマの政情がよくなれば出身地の少数民族州に戻り、少数民族語の継承などの文化活動に携わりたいと考えている。しかし、アウンさんは、「民政移管」後のビルマについて何も変化していないと評価しており、この先も日本に止まるしかないと考えている。

日本生まれの子どもは、日本の学校に通い、日本語を中心に生活している。ビルマ語と少数民族語は聞けば少しは理解できるという程度である。生まれてからしばらくの間は国籍がなかったが、自分の子どもを日本国籍保持者にする考えはなかった。自分の国籍を変更する気もない。2014年の「民政移管」後に一時的に帰国し、無国籍の状態になっていた子どもを登録し、国民登録証を入手した。ビルマの一部の地域では、日本の公的書類を見せれば信頼され、諸手

続きがスムーズに行えるのだという。

苦勞して子どもの書類手続きをしたが、当の子どもや配偶者にはビルマで生活するという考えは一切ないという。この点について、アウンさん自身も、家族の考えを理解している。アウンさん自身は、できるだけ早い時期にビルマに戻りたいと願っているが、現実的には祖国に戻っても生活再建が難しいと考えている。そして、この先も現在の生活拠点である日本での暮らしを継続せざるを得ないであろうと覚悟を決めている。そのために、日本で築いた生活基盤を維持していくことを第一に考えなければならないと、いつも子どもに諭している。

アウンさんは、諸事情により、来日後一度も出身地ビルマを訪問したことがなかった。「民政移管」後に日本生まれの子どもを祖国で国民登録するために初めて一時帰国した。それまで日本国籍取得の方策を練ることは全く考えなかった。自分と同じように、子どもにもビルマ国籍を与えることが親の責務であると考えていたのである。つまりアウンさんの視線は、常に祖国ビルマに向いているといえる。しかし、現実には目を向ければ、この先も引き続き日本に滞在する可能性が高いと感じているのも事実である。今後、子どもが成長し、日本国籍を取得していないことによって何らかの不利益を被る可能性もある。それが容認できないとなれば、家族揃って日本国籍取得という動きがでてくるかもしれないが、アウンさんの場合には、例え日本国籍を取得しても日本人としての意識をもつ可能性は低いと考えられる。

4-2: エイさん（仮名）の場合¹⁴

ヤンゴン近郊出身のエイさんは、親の仕事の都合で学齢期に複数回の転校を経験した。曾祖父が中国出身であったと聞いたが、出身地は不

¹⁴ 2016年12月29日に聞き取り調査実施。

明である。祖父および親はミャンマー¹⁵生まれでミャンマー国籍を有している。祖父、親、そしてエイさん自身も中国語を操ることはできない。わずかであるが、親戚の結婚式や墓が中国式であったと記憶している。エイさん自身は、中国人の血が入っていると理解はしているが、自分はミャンマー人であると自覚していたという。

大学卒業後には在学中に学んだ専門知識を活かした職業に就いていたが、同級生が海外留学を通し大きな成果を得た様子を目の当たりにして、自分もいつか必ず留学したいと考えるようになった。同じアジア圏に位置していることから文化面等で共通点が多いと考え、同級生がすでに学んでいた日本を選んだ。

まず、日本語学校、次に専門学校、最終的に大学院の博士課程に在籍した。課程修了後に現在の職場に就職し、以後ずっと同じ職場で働いている。就職が決まったのと同じ時期に、ミャンマーの知り合いからも専門性を生かせる仕事の誘いがあったが、それを断り日本に留まった。

その後、結婚し、子どもが生まれた。家庭内の共通言語は日本語で、子どもは日本の学校に通っている。配偶者と子どもは日本国籍を有しているが、エイさん自身はミャンマー国籍のまま、日本の永住者資格を取得している。今のところ日本国籍に変更する気持ちはない。海外出張時の手続きが煩雑であることから、ミャンマー・パスポートの不便さについては認識しているが、「なんとなく今のところはミャンマーの国籍をもっていたい」との思いがある。強いこだわりがある訳ではないが、ミャンマー・パスポートに愛着がある。

エイさんは、「日本に長い間住んでいるから

日本人になってしまったといつも周りに言っている」、「周りの人にもよく言われる」という。そのように考えるのは、すでに自分の人生の半分を日本で過ごしているからである。さらに突き詰めると、「ミャンマー人とか日本人でもない、無国籍と考えている」という。このような考えの根底には、来日以降、国籍の異なる多くの人と知り合ったが、人間の価値は国籍で決まるのではなく、個人個人の資質で決まるものだという確信がある。交流する相手を国籍で選ぶのではなく、その人自身をみて、自分が信頼できると判断した人と付き合いたいと考えようになった。

職場での不満はほとんどないが、外国人の意見をもっと重視すべきだと考えている。外国人だから、日本のことや仕事のことは十分に理解していないと思われる。職場の他の外国人と同様に、日本は自分にとって「2番目の祖国」と捉えているが、周りの日本人はその点を理解してくれない。ミャンマー出身の友人は多いが、日本人とはなかなか親しくなれず、大事なことを相談できる友人は数えるほどしかない。

日本も少しずつ変化してきているが、韓国や中国と比べて変化する速度が遅いと感じている。そのため、自分の子どもが将来日本社会に受け入れられるのかという点を危惧している。日本生まれの子どもは、日本文化の中で日本語を母語として成長しているが、片方の親の出身国であるミャンマーについても熟知してほしいと思っている。その上で日本社会に入っていくことができればよいと思う。

エイさんは、留学生として来日し、日本で学業を終えれば帰国する予定であったが、日本で生活基盤を築き、日本生まれの子どもを養育す

¹⁵ エイさんへの聞き取り調査では、ビルマではなくミャンマーが自身の出身国として語られたので、そのまま

使用する。

るなど、継続して日本で生活している。自らの意思で選択し、当初の予定とは異なる人生を歩んでいる。ただし、日本に長期滞在してはいるが、出身国であるミャンマーの国籍やパスポートに愛着があり、現在のところは日本国籍を取得するつもりはない。「弱いパスポート」について、海外旅行時の手続きが不便である点を認識しつつも、今のところは変更したくない意向がある。

しかしながら、それと同時に日本を第二の祖国だと捉え、自分自身は日本人のようだと感じ、周りからもそう言われることに違和感もない。つまり、日本国籍未取得であっても、その滞在期間の長さなどから、日本人であるというアイデンティティが芽生えてきているのである。その上で、自らを無国籍者であると捉えている点は注目に値する。

つまり、イエさんは、ミャンマーへの愛着から国籍は変更していないが、完全にミャンマー側に所属しているのではなく、また、日本人のようだと自他共に認めながらも、完全に日本側に所属しているわけでもない。自分のアイデンティティは国籍と必ずしも一致しないと捉えているようである。双方とのつながりをもちつつも何れにも属していない状態にいるといえる。

4-3: イエさん(仮名)の場合¹⁶

成人前に来日したイエさんは、来日前から家族が政治活動に積極的に関わっており、来日後も引き続き活動していた。それを間近にみて育ち、間接的に運動を手伝ううちに、自分も活動家であると自覚するようになった。来日前には、公安関係者が何度も家を訪れるようになっていた。もうこれ以上留まると危険だという段階まで身を隠し、間一髪で逃げ切り、国境を越えた。親戚が暮らしている欧米諸国への渡航を

希望したが、選り好みをしている余裕はなく、結果的にビザを容易に入手できた日本が行き先となった。そのような一歩間違えば命の保証がないという危険を冒して生き延びたため、祖国ビルマへのこだわりが強い。来日して約四半世紀を日本で過ごしたが、日本国籍を取得する予定はなく、この先も「ずっとビルマ人でいたい」という気持ちがある。永住者資格で滞在許可を得ている。

しかし、イエさんは、日本滞在年数が、来日当時の年齢を越えた時点で、自分はこれから「ナニジン」になるのかと自問するようになった。自分は、親世代と同様にビルマ人であるという気持ちがあり、ビルマは「帰る」場所であって、「行く」場所ではないと捉えている。躊躇なく「ビルマに行く」と答える日本生まれの2世とは異なる。イエさんは2世とは明らかに異なるが、親世代のように成人してから来日したわけでもない。その中間に位置する自分は非常に曖昧な存在であると感じている。祖国ビルマのための政治活動の経験を通して、ビルマ人である自分を意識し、ビルマ国籍に愛着をもっているが、生活基盤は日本にあり、その滞在期間はビルマで暮らした期間よりも長くなっている。親を始めとする周囲の人からは、ビルマ人とみなされず、外国人扱いをされている。「ビルマ人なんだけど、生活基盤は日本なんだよね」という話になり、自分が一体何者であるのかと考えるようになった。そして、行き着いた先は、「ビルマ生まれ日本育ちの地球人」という経験に基づいたアイデンティティの確立である。それと同時に、相手がビルマ人であっても、日本人であっても、自分が中心となって行動し、相手に合わせることをしなくなった。したがって、ある場面ではビルマ人の部分で接し、また別の場面では日本人の部分が出てしま

¹⁶ 2016年8月25日に聞き取り調査実施。

い、白い目で見られることもあると感じているが、それを含む全てが自分であるという気持ちが強くなっている。

この段階に至るまでには悩みはつきなかったが、ビルマ人でもなく、日本人でもなく、自分は地球人であると今は捉えている。結局はナニジンという捉え方は重要ではないと考えている。2世やハーフの人は、自分が何者なのかと悩んでいるが、自分たちは、複数の文化とつながり、そこから選ぶことができるという意味で得なんだと言いつけている。

イエさんの配偶者と子どもは日本国籍を有している。しかし、子どもは日本人として育てるのではなく、自分の経験を活かして「地球人」として育てたいと考えている。育児については、実の親、義理の親の何れの考え方もそのまま受け入れることはしない。当初は双方の親の意見を取り入れようとしていたが、異なる文化背景をもつ両者に合わせるとブレがでてくるようになった。やがて、親である自分がぶれてはいけなと考える、常に自分の考えが世界的な基準に見合っているかを問い、親の考えよりそちらを優先するようになった。複数の国とつながって生まれたことを肯定的に捉えられる子どもになって欲しいと願っている。

イエさんには、来日前の政治活動経験を通してビルマ人であることを簡単に放棄したくないという祖国へのこだわりが見出せる。そのため、ビルマは「行く」場所ではなく、「帰る」場所であると捉えており、祖国と確固としたつながりがあるかのようにみえる。しかしながら、日本滞在年数が長くなるにつれて、自分がナニジンであるのかという迷い、いわゆるアイデンティティ・クライシスを経験した。悩みの後には、「ビルマ生まれ、日本育ち、地球人」という経験に基づいたアイデンティティの獲得が見出せる。また、両親や周りのビルマ人からは日本人、日本人からはビルマ人と捉えられる

という経験から、ビルマと日本という二つの国とのつながりを有している自分自身や同じ立場にある人は、複数の文化に接することで得しているのだと考え、その状態を非常に肯定的に捉えている。そして、家族や周りの人とのつながりにおいては、どちらか一方の文化ではなく、世界基準かどうかを意識している。

つまり、イエさんはビルマ国籍へのこだわりをみせつつも、人生の半分以上を日本で過ごしているという事実に基づいて、ビルマ人であるというアイデンティティをもつことはできなくなった。かといって、四半世紀暮らしていても外国人扱いされる日本では、日本人であるというアイデンティティを持つこともできていない。日本、ビルマの何れにも居場所を見出せない結果として、「地球人」というアイデンティティをもつにいたったといえる。

4-4：3名の共通点と相違点

本節では、アウンさん、エイさん、イエさんの事例から、日本国籍未取得者が日本人であるというアイデンティティをもつことが可能であるのか、また、祖国ビルマと日本という二つの場の間でどのようなつながりを有しているのかを明らかにした。以下では3名の共通点と相違点を述べる。

まず、日本国籍未取得の日本定住ビルマ人が日本人であるというアイデンティティをもてるのかという点について、エイさんの事例から、部分的ではあるが、持てることが分かった。エイさんは、日本を第二の祖国だと捉え、自らも日本人であると思っている。また、まわりからも日本人のようだとわれ、それを受け入れている。ただし、エイさんが考える日本人像については詳しく検証できなかった。とくに、日本人であると捉えている一方で、無国籍であると表現している点については、エイさんの居場所のなさが読み取れる。もし、エイさんが日本社

会で確固とした居場所を見出せるのであれば、より積極的に日本人であるというアイデンティティをもつかもしれない。

逆に、アウンさんとイエさんには、出自へのこだわりがあるが、日本人というアイデンティティは見いだせない。ただし、イエさんの「地球人」という表現からは、エイさんと同様に、居場所のなさうかがえる。日本社会にしっかりと受け止められているとイエさんが感じる事ができていれば、「地球人」というアイデンティティの代わりに、または、同時に日本人であるというアイデンティティをもったかもしれない。

次に、各人のビルマと日本とのつながりについてみてみたい。アウンさんは、日本生まれの子どもにビルマ国籍を取得させるため、出生時からアウンさんがビルマへ入国できるようになるまで無国籍状態においていた。アウンさんにとっては、帰国が実現できるという確信はなかったと思われるが、その不確実性よりも、我が子をビルマ国民にするという気持ちが強かった、つまり、祖国ビルマへのこだわりの強さの表れと捉えることができる。しかし、変わらない祖国という現実的な問題の前には、この先も日本で暮らしていくしかないという覚悟もうかがえる。これまで海外渡航の機会がなかったアウンさん一家にとって、「弱いパスポート」は必要なかったが、今後も日本を生活拠点とするのであれば、ビルマへの一時帰国など、海外渡航のたびに「弱いパスポート」の不便性を体感するかもしれない。それをアウンさんやアウンさんの家族はどのように受け止めるのだろうか。この点については、本調査では明らかにできなかったが、今後、継続して調査していきたい。

エイさんは、海外渡航の際に「弱いパスポート」を認識する機会があるが、それにもかかわらずミャンマーのパスポートに愛着をもってい

る。それと同時に、日本に生活基盤があることから、自他共に「日本人になってしまった」と考えている。この点からは、ミャンマーと日本双方との強いつながりが確認できる。しかし、エイさんには、ミャンマー人であり、また、日本人であるという複合的なアイデンティティではなく、何れにも属さない無国籍者というアイデンティティが形成されている。この点は、日本が複合的なアイデンティティを有した人をいかに受け入れているのかに関わってくるだろう。すでに確認したように、日本国籍を取得していなくても、自己を日本人であると捉える人は存在するはずであるが、それを受け入れる土壌がないことが、当事者の居場所のなさにつながっているのではないだろうか。またエイさんは、曾祖父が中国系であると認識しているが、それが自分のアイデンティティを形成しているとは考えていない。先のアウンさん同様に、少数民族グループや外国とのつながりをもつミャンマー人のアイデンティティのあり方について、今後より詳細な考察が必要である。

イエさんは、来日前後の政治活動の経験などから、祖国ビルマとのつながりを重視している。しかし、日本滞在期間が長くなるにつれて、完全にビルマ人であると言い切れない自分と向き合ってきた。ビルマと日本双方の文化を受け継いでいる自分は得をしているのだと言い聞かせているが、実際のところは、その何れでもない世界的な基準を物事の判断基準にしている。それは、イエさんの「ビルマ生まれ、日本育ち、地球人」というアイデンティティのあり方に表れている。地球人という捉え方は、先のエイさんの例と同様に、ビルマと日本という複合的なつながりではなく、どちらにも所属していないことの表れと捉えてよいだろう。さらに、日本生まれの自分の子どもを「地球人」として育てたいとの発言からは、日本には居場所がなく、日本人というアイデンティティをもと

うとしても、外国人とみなされかねないという懸念が見出せる。つまり、ビルマと日本という、イエさんとつながりを有する二つの国の何れとも積極的なつながりをもつことはできないと考え、その代わりに国家にこだわらない「地球人」という新しいアイデンティティをみいだしているといえる。

おわりに

本稿では、約四半世紀の日本滞在経験をもつ日本定住ビルマ人への聞き取り調査から、当事者のアイデンティティ形成のあり方を考察した。まず、日本国籍を取得しなくても、長期にわたり、日本で生活基盤を築いているという経験に基づき、日本人であるというアイデンティティをもちうる点が明らかになった。この結果は、多様化する日本社会のあり方をより積極的に捉えるための指針にもなるだろう。今後、日本定住ビルマ人全体にはどのような傾向があるのかを明らかにしていきたい。

日本定住ビルマ人のビルマおよび日本とつながりに関しては、何れもが祖国ビルマとのつながりにこだわりつつも、この先も日本での生活を継続していくことへの覚悟ができていく点を指摘できる。アウンさんは、ビルマ情勢への不満をきっかけに来日したが、子どもをビルマ国籍保有者にする点で、ビルマへのこだわりが見いだせる。留学目的で来日したエイさんは、強いこだわりはないがミャンマー・パスポートに愛着があり、日本国籍は取得していない。イエさんは、政治活動後に身の危険から逃れるため来日した経験からビルマ国籍保有へのこだわりがある。ただし、成人前に来日したイエさんはビルマ人であるというアイデンティティが揺らいでおり、来日時の年齢が影響している点を指摘できる。日本とのつながりでは、エイさんとイエさんの例が示すように、日本定住ビルマ人

にとっては、複合的なアイデンティティをもつことが容易ではない点が明らかになった。エイさんは部分的に日本人であるとの認識を有し、また、イエさんは日本とのつながりを肯定的に捉えているが、何れもが、無国籍者または「地球人」という所属のなさを証明するアイデンティティをもっている点が共通する。「弱いパスポート」が日本定住ビルマ人の日本国籍取得やアイデンティティ形成に影響を与えている点は明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

本稿は2015-2017年度科研基盤（C）「『ビルマ系日本人』は誕生するのか—家族のつながりとアイデンティティのあり方—」の成果の一環である。

参考文献

- 梶村美紀2014『日本定住ビルマ人の変容：少数民族とバマの 에스ニシティを超えた連帯』東京大学大学院総合文化研究科提出博士論文
- 梶村美紀2015「定住ビルマ人の将来——「多文化共生」の観点から」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報2014-2015』
- 梶村美紀2016「在日ビルマ人ネットワークの諸相——1988～2013年の東京における組織活動を中心として——」根本敬編『上智大学アジア文化研究所occasional Papers(20)在外ビルマ人コミュニティの形成と課題——日本と韓国を事例に——』
- 工藤年博編2015『ポスト軍政のミャンマー—改革の実像—』アジア経済研究所
- 久保公二2016「ミャンマー人移民労働者の地下送金手段の変容」『アジア研ワールド・ドレンドNo.245』No.245, pp.31-34
- 駒井洋監修 佐々木てる編著2016『マルチ・エスニック・ジャパニーズ ○○系日本人の変革力』明石書店
- 佐々木てる2006『日本の国籍制度とコリア系日本人』明石書店
- 佐々木てる2014「在日コリアンとシティズンシップ—権利と国籍を中心に（特集：在日コリアンの過去・現在・未来）」『移民政策研究 第6号』pp.44-57
- 白井美由紀2007『日本国籍をとりますか？ 国家・国籍・民族と在日コリアン』新幹社
- 陳天璽2012「国家と個人をつなぐモノの真相—「無国

- 籍」者のパスポート・身分証をみつめて」陳天璽ほか編著『越境とアイデンティフィケーション』新曜社、pp.444-468
- 山田美和2012「アウンサンスーチーのマハーチャイ訪問が意味すること——ミャンマーの発展と移民労働者問題——」『アジア研ワールド・トレンド』No.203、pp.36-40
- 李洙任2016「コリア系日本人の再定義 「帰化」制度の歴史的課題」駒井洋監修、佐々木てる編著『マルチ・エスニック・ジャパニーズ ○○系日本人の変革力』明石書店、pp.108-129
- Aihwa Ong1999, Flexible Citizenship: The Cultural Logics of Transnationality, Duke University Press.
- Gracia Liu-Farrer 2015, "Citizenship and Belonging Among Newcomer Immigrants in Japan", Journal of Asia-Pacific Studies (Waseda University) No. 24.
- KAJIMURA Miki 2015, "Residency Trends among People from Burma Living in Japan", East Asian Review Vol.16.

参考資料

- 法務省在留外国人統計「国籍・地域別 在留資格（在留目的）別 在留外国人」、<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001177523>、2017年11月30日閲覧。
- 法務省「帰化許可申請者数、帰化許可者数及び帰化不許可者数の推移」、<http://www.moj.go.jp/content/001180510.pdf>、2017年11月30日閲覧。
- Executive Summary of Myanmar Labour Force, Child Labour and School-to-Work Transition Survey, 2015, The Republic of the Union of Myanmar Ministry of Labour, Immigration and Population Department of Labour in collaboration with the International Labour Organization、http://www.ilo.org/wcmsp5/groups/public/--asia/--ro-bangkok/--ilo-yangon/documents/publication/wcms_516117.pdf、2017年11月30日閲覧。